

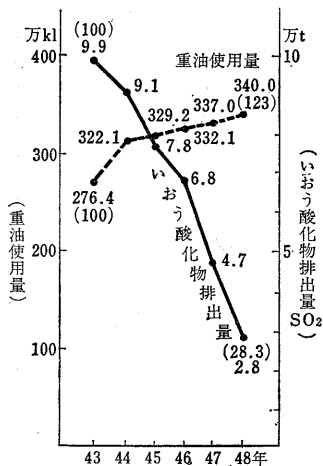


15 公害

いくらかきれいになったハマの空

横浜市では、公害対策にいち早くとり組み、大手工場との間で公害防止協定を結び、法律の基準以上の厳しい対策を実施させる横浜方式によって成果をあげてきた。また、大気汚染防止法・県公害防止条例による規制・指導も強化され、降下ばいじんは、昭和四十年頃から減少し(図-74)、大気汚染の主役とされてきたいおう酸化物の濃度(図-74)、大気中の濃度も、全市的に低下してきている(図-75・76)。しかし、窒素酸化物・オキシダント・一酸化炭素等の汚染物質は、まだ環境基準を上回る地点もあり(図-77)、また、大気汚染に起因するぜん息等の公害病患者も四十八年度末で、四二七名に達し(図-78)、大気汚染は依然として深刻な問題となっている。こうした中で自動車排出ガスの、いわゆる五十一年度規制の完全実施を他の都市と共に国に対して強く求め、横浜にすみきった青空をとり戻す努力が続けられている。

図-75 いおう酸化物排出量の推移
(重油から排出するものについてのみ)

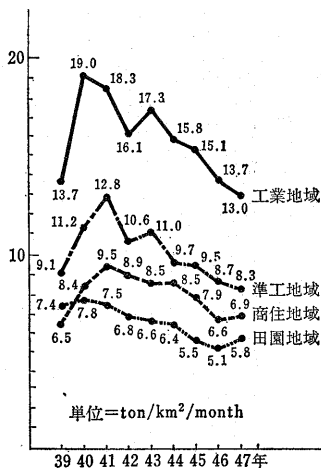


〔注〕 ① 45年以前の数値は神奈川県集計より推定

② () は昭和43年を100とした指数

〔資料〕 公害対策局

図-74 降下ばいじん量の推移

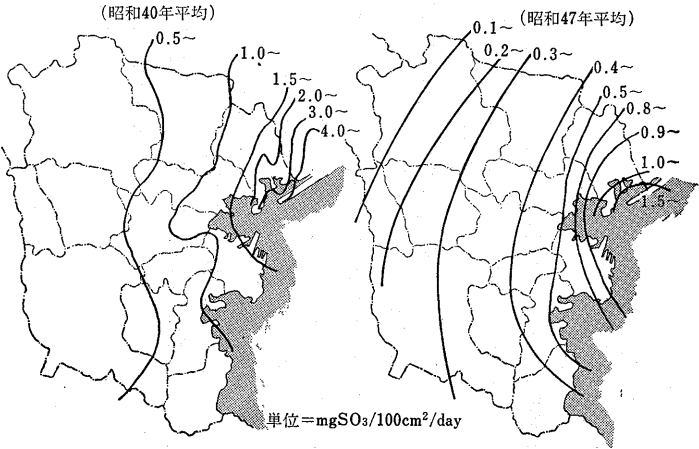


〔資料〕 公害対策局



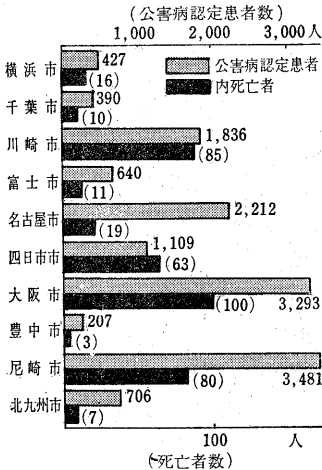
公害

図-76 いおう酸化物等濃度線図 (PbO₂法)

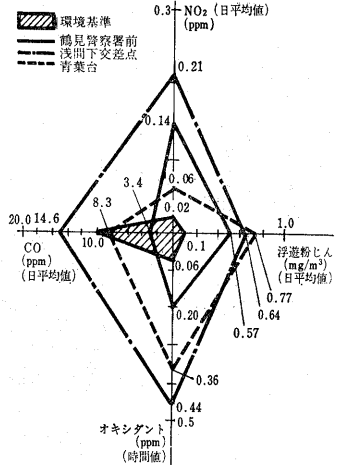


【資料】 公害対策局

図-78 公害病認定患者数の都市比較 図-77 大気汚染の状況 (昭和48年度末現在)



【資料】 公害対策局



【注】 47年度における各地点の最大値と環境基準との比較 【資料】 公害対策局



横浜の一〇年

まだ汚れている河川

下水道の完成している区域の河川は、浄化のきざしが見えているが、BOD(生物化学的酸素要求量)一〇PPMの臭気限界を上回る地点がほとんどで、鶴見川等では三〇PPM以上のひどい汚れを示すところもあり、市内河川は汚水路と化している(図-79)。こうした河川の汚れは、急激に増加している家庭排水に主因があり(図-80)、下水道の早期完成が望まれている。また海域でも、横浜港沿岸などで、COD(化学的酸素要求量)三PPMを越えており(図-79)、魚がすむのにふさわしい環境ではない。横浜市ではシアン・水銀等の汚染への監視を含め、主因となっている工場排水(図-80)の処理施設の設定、工場に対する立入検査等の規制を強めている。横浜駅周辺や内陸の一部の激しい地盤沈下への対策も急がれる(図-81)。市民からの公害苦情も、四十七年で八二九件にのぼり、騒音、悪臭への苦情が多い(図-82)。

図-80 水質汚濁の原因

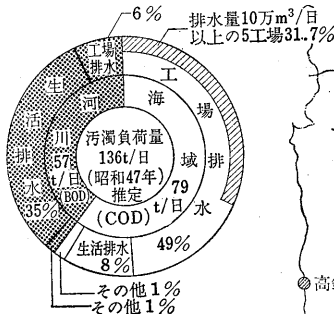
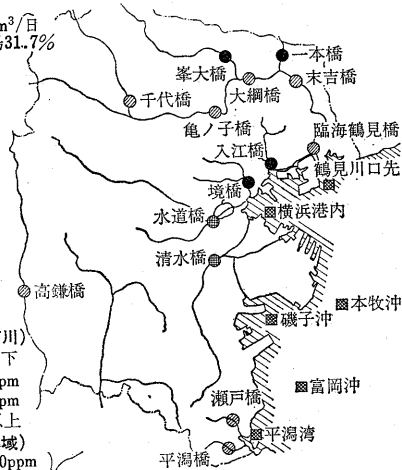


図-79 川と海の汚濁状況

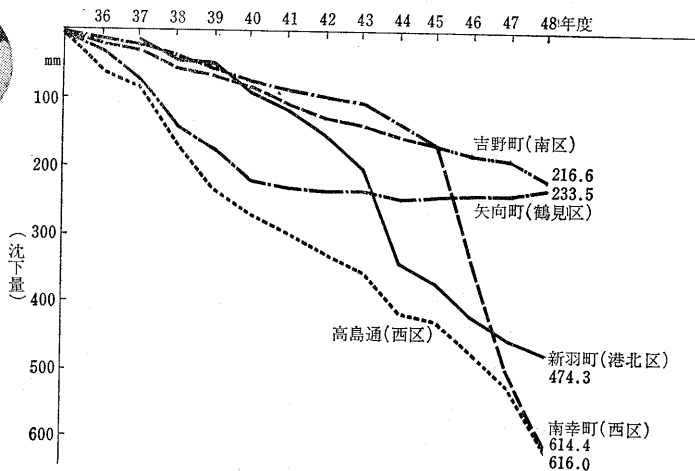


[注] 河川BOD; 月1回1日4回の単純平均 (48/4-49/3) [資料] 公害対策局
海域COD; 月1回1日2回2層の単純平均 (48/4-49/3)



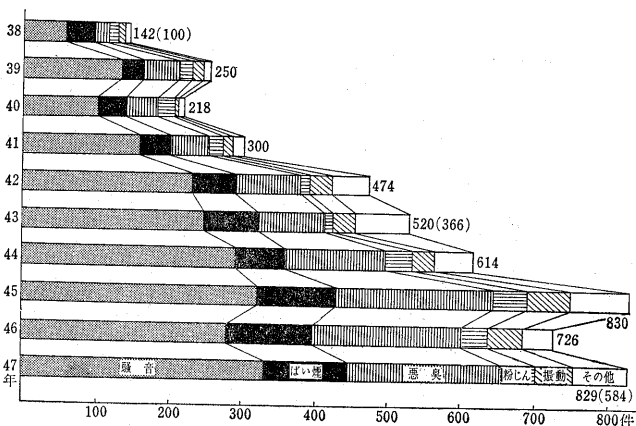
公害

図-81 地盤沈下量の経年変化



[資料] 公害対策局

図-82 公害苦情件数の推移



[注] () は昭和38年を100とした指数
 [資料] 公害対策局